

失われたわよね！

～日本語の性的分岐表現～

シンキング・バーズ

日本語研究班

「～わ」「～わよ」「～わね」 女性日本語の変質の中で

ワ タシたちがかつて馴染んだ小説やテレビドラマ、あるいは映画などで、女性日本語（ジェンダー）用法だった語法に、「～わ」「～わよ」「～わね」があります。ワタシは、日常生活でほとんど使わなかったこの「～わ」「～わよ」「～わね」に違和感を覚えた一人で、一般的な女性語みたいに「～わ」を使うのは止めてくれない？ と思ったものでした。

時が経ち、ワタシの知る限りでは、メディアを含めて「～わ」「～わよ」「～わね」に接する機会は、少なくなりました。そして、性的マイノリティーの男性たちがこのことばを使い、若い女性たちが「甘ったれんじゃねーよ」などと言っているのを耳にすると、あらためて日本語のジェンダー語法について考えてみたくなりました。

●女性語法ではなかった「～わ」

日 本語の「～わ」が女性語法に特化したのは、恐らく明治時代以降のことです。男性語法としてもあった言い回しで、「そりゃ、あんた、見事なもんじゃったわ」は、性的分岐が明確とは言えません。

夏目漱石は、女性話体に「～ですわ」などを用い、性的分岐用法のひとつにしまし

た。その試み自体は、良いことなんでしょうね。読んで女性話者と分かるんですから、有効な方法と言えます。また、当時は俗語だった「です（男性語の「だす」「げす」「がす）」 + 「わ」の組み合わせは、けしてお高くとまった語法ではありませんでした。

以来、女性作家を含めて「～わ」の会話用法は、多用されるようになりました。「分かったわ」は女性で、「分かったよ」は男性。「読ませて頂くわ」は女性で、「読ませてもらうよ」は男性。これがやがて、「あら、まあ、いやだわ」とお高い感じになります。



●「女らしさ」と言語表現

ワ タシは個人的に、「～わ」の女性語法が嫌いでした。「～わ」を使わなくても、女性会話体になると思っていました。でも、「なんか、これ、みみっちくない？ ダサいよねエー」なんて言ってる女の子たちの会話を耳にすると、「～わ」にも一定の役割があったのかな、なんて思ったりします。

言語における性的分岐は、いわゆる「男らしさ／女らしさ（ジェンダー）」と結びついています。ワタシは、言語の性的分岐や年齢分岐をなくすことが、必ずしも良いこととは思いません。強要されない女らしさの言語表現を、あえて使ってみるのも、たまには良いわよね、です。

(2019年12月7日)

※参考にさせて頂いた文献 夏目漱石著『草枕』（1982年11月、新潮文庫）

シンキング・バース新書

ボクとワタシの日本語診断
失われたわよね！

2019年12月7日（初版）発行

著者：シンキング・バース
日本語研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：シンキング・バース
〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バースに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。